

# SHOW-HOMEシネマフルーツ

★★★★★



Data

2023-12-1

監督・脚本・石井裕也

原作：辺見庸『月』

出演：宮沢りえ／磯村勇斗／二階堂

ふみ／オダギリジョー／長

井恵里／大塚ヒロタ／笠原

秀幸／板谷由夏／モロ師岡

／鶴見辰吾／原日出子／高

畠淳子

## み ど こ ろ

2019年7/18の「京アニ事件」も、2022年7/8の「安倍前首相銃撃事件」も酷いが、2016年7/26の「やまゆり園殺傷事件」はもっと酷い。その死傷者数は？殺害の態様は？犯人像は？

同事件に着想を得た小説が辺見庸の『月』だが、同作を、独特のセンスで話題作を作り続けている石井裕也監督が渾身の力で映画化！主演は宮沢りえだが、重度障害者施設である三日月園で働く若者“さとくん”や“もう1人の陽子”はいかなる役割を？

画家を目指していたヒトラーが、もし希望通り美大に合格していたら？それは、「クレオパトラの鼻がもう少し低ければ？」と同じく無意味な仮定だが、なぜ、さとくんは「心はありますか？」を“ひと”と“物体”を仕分けるメルクマールに据えたの？

さとくんがヒトラーと同じような“優生思想”的化け物になってしまったことについては、しっかりドイツ観念論（哲学）にも思考を巡らせ、さらにドストエフスキイの『罪と罰』とも対比したい。

### ■□■石井裕也監督に拍手！まだ40歳だが、意外に多作！■□■

石井裕也監督は、『舟を編む』（13年）『シネマ30』（未掲載）で第37回日本アカデミー賞最優秀作品賞、最優秀監督賞を受賞したことで一躍有名になったが、私は同作をあまり高く評価していない。私が彼に注目したのは、その前の『川の底からこんにちは』（09年）『シネマ25』（164頁）を観た時だ。その理由の1つは、私の大好きな若手女優・満島ひかりが主演女優として面白いヒロイン役を演じていたためだが、園子温、矢口史靖、荻上直子らの才能を発掘し続けてきた、「ぴあフィルムフェスティバル（PFF）」の第19回スカ

ラシップ作品となった同作のストーリーはメチャ面白かった。

石井監督は1983年生まれだから、『舟を編む』での受賞は30歳の時。それから本作の公開まで10年しか経っていないが、その間の彼の作品は非常に多い。もっとも、私の評価では、『パンクーバーの朝日』(14年) (『シネマ33』207頁) は力作だったし、尾野真千子を主演に据えた、母親についての物語である『茜色に焼かれる』(21年) (『シネマ48』148頁) も名作だった。しかし、『夜空はいつでも最高密度の青色だ』(17年) (『シネマ40』未掲載、星3つ) も、『町田くんの世界』(19年) (『シネマ45』未掲載、星2つ) も私の評価は低い。また、『アジアの天使』(21年) (『シネマ49』206頁) もイマイチで星3つだった。さらに、10月27日公開の『愛にイナズマ』(23年) にも私はあまり期待していない。

このように、私の独断と偏見によれば、石井監督作品には出来の良し悪しのムラがあるが、「やまゆり園殺傷事件」に着想を得た辺見庸の小説『月』を原作とした本作は、石井監督渾身の社会問題提起作だ。私は来たる10月27日公開の石井監督の最新作『愛にイナズマ』を観る予定にしていたが、10月13日の夕刊を見て急遽本作の公開を知り、「こりや、必見！」とばかり、翌10月14日に本作を鑑賞することに。

## ■□■やまゆり園殺傷事件とは？犯人・植松聖の人物像は？■□■

2022年7月8日に起きた安倍前首相銃撃事件には日本国民全体が震撼させられた。また、2019年7月18日に起きた京都アニメーション放火殺人事件(京アニ事件)も同様だ。2023年10月の今、前者については2023年10月13日に奈良地裁で第1回公判前整理手続が始まったが、被告人の山上徹也本人は出席しなかった。また、死者36名と負傷者33名という、戦争を除く明治時代以降の事件において、日本で最多の犠牲者数となった後者については、重い火傷から回復し、また、2度にわたる精神鑑定を終えた青葉真司被告が出廷のうえ、事件後4年余を経た2023年9月5日、京都地裁で第1回公判期日が開廷された。その様子はマスコミ報道の通りだが、これから裁判員裁判の下で続していく裁判の展開と結末はいかに？

他方、あなたは「障害者施設やまゆり園殺傷事件」を知ってる(覚えてる)？これは、2016年7月26日に、神奈川県相模原市にある知的障害者施設、津久井やまゆり園で起きた事件。そして、同施設の職員だった植松聖が同施設に刃物を所持して侵入し、入所者19名を刺殺、入所者・職員計26名に重軽傷を負わせたという凄惨な大量殺人事件だ。安倍前首相銃撃事件の被告人・山上徹也の人格や、京アニ事件の被告人・青葉真司の人格は今後の刑事裁判を通して少しづつ明らかにされてくるだろうが、やまゆり園殺傷事件の犯人として死刑判決を受けた植松聖の人物像は如何に？

## ■□■原作は辺見庸の『月』。小説VS映画の異同は？■□■

やまゆり園殺傷事件に着想を得て2017年に発表された小説が辺見庸の小説『月』。これは、事件を起こした個人を裁くのではなく、事件を生み出した社会的背景から人間存在の奥底に向かわねばならないと感じた著者が、〈語られたくない事実〉の内部に潜ることに独

自のアプローチと破格の形式で挑戦した小説らしい。同小説は、ほぼ全編、施設のベッドに寝たきりでほとんど動けない“重度障害者、性別・年齢不詳のかたまり”と描写されている入所者のひとりである「き一ちゃん」の視点から書かれており、唯一全37章の第36章だけが「さとくん」の視点になるらしい。

10代の時から辺見庸の作品に魅せられてきたという石井監督は、この原作を読んで大きな衝撃を受けたそうだが、彼が本作の監督を務めることになったのは、植松聖と直接面会もしたという故・河村光庸プロデューサーが、いわば「薩長同盟」における坂本龍馬の役割を果たしたためらしい。そこらの“ウラ事情”については本作のパンフレットに詳しいのでそれを参照してもらいたいが、私が興味深いのは、石井脚本は原作を大きく変更していることだ。

本作で犯人役となる、さとくん（磯村勇斗）の人物像について、基本的に植松聖を投影した人物にしたのは当然だが、小説と映画での相違点は如何に？なお、脚本の変更点で一番大きいのは、二階堂ふみ演じる職員・坪内陽子を作り出したことだが、石井監督は辺見庸の原作を映画化するについて、なぜそんなふうに大胆な変更を？

### ■□洋子（宮沢りえ）×昌平（オダギリジョー）の表と裏は■□

本作冒頭、実年齢50歳になった（なってしまった）美人女優、宮沢りえ演ずる、劇中では40歳になった堂島洋子が、太陽が見えないほど深い森の奥にある重度障害者施設「三日月園」に徒歩で通勤する姿が映し出される。本作はホラー映画ではないが、これを見ただけでもかなり不気味だ。洋子は東日本大震災を題材にしたデビュー作の小説で評価されたものの、それ以降作品は書いていない（書けない）らしい。

そんな洋子を私生活でも「師匠」と呼び、尊敬しているのが、夫の昌平（オダギリジョー）だ。彼は人形アニメーション作家として作品展への応募を繰り返しているが、落選続々。したがって、それを仕事として定期的な収入があるわけではないから、いわば趣味のレベルだ。そのため、この夫婦は経済的に厳しいのだろうが、そうかと言って、何も洋子がわざわざ“あんなところ”で働くなくてもいいのでは？後日聞くところによれば、月収も17万程度というからなおさらだ。もっとも、作家としての再起を狙っている（？）洋子にとって、この仕事は次の小説のための“ネタ集め”を兼ねているの？それならそれで前向きなのだが・・・。

洋子と昌平は一見思いやりに満ちた仲の良い夫婦のようだが、互いに何かを遠慮している雰囲気が強い。つまり、この夫婦は互いに“表と裏”があることが明らかだ。そこで問題は、それがいつ、どんな形で噴出、爆発するのかということ。もちろん、それが露見しないままコトが順調に進めばいいのだが・・・。

この夫婦がそんな風になった原因是、数年前に2人の間に生まれた子供が心臓に重度の障害を持っていたため、一言も話すことなく3歳で亡くなったという悲痛な経験を“共有”し、共犯意識（？）のような感覚を持っていたためだ。そのため、洋子がある日、思いが

けない妊娠を知ると、洋子は大きく動搖。今度産めば、40歳を超えての高齢出産になるから、障害児を産むリスクが高まるのでは？もっとも、今ドキは生まれる前の赤ちゃんに異常がないかを調べる出生前検査ができる。もしそこで障害があることがわかれれば、90%以上の妊婦は人工妊娠中絶しているそうだが、自分はどう選択すればいいの？洋子は妊娠を夫に打ち明けることもできず、産むか産まないかの決断をすることも、出生前検査を受けるか否かの決断もできないまま、ズルズルと勤務を続けることに・・・。

### ■□洋子が見たものは？彼女の怒りはどこに？■□

三日月園での勤務に少しづつ慣れ、弟や妹のように年の離れた施設職員とも仲良くなつていった洋子が、親しみを持ち、仲良くなつていった（？）のは“き一ちゃん”だ。き一ちゃんは、光の届かない部屋の中でベッドに横たわったまま動かない存在だが、なぜか洋子は他人に思えず親身になつていったようだ。しかし、それは一体なぜ？単に洋子と生年月日が同じというだけで、どうしてそんな気持ちになれるの？そもそも、そんなき一ちゃんは“ひと”と言えるの？

そんな風に少しづつ職場に溶け込んでいく洋子だったが、他方では一部職員による入所者への心ない扱いや暴力、虐待を目の当たりにした洋子がそれを園長に訴えると、園長は「そんな職員がここにいるわけない」と惚けるばかりだから話にならない。単なる施設の一職員すぎない洋子ですら（だからこそ？）園長のそんな態度に怒りが込み上げてきたが、それをどこに向ければいいの？もっとも、今、妊娠が判明した洋子にとっては、園のことより自分のことの方がそれ以上に大事・・・？洋子の気持ちがそんな風に揺れ動いたのは当然だ。

前述のように、原作はほぼ全編が「き一ちゃん」の視点で書かれているそうだ。小説ではそれが可能だとしても、映画では不可能だから、本作では、そんなき一ちゃんが言いたいことを代弁するのが陽子の役割になつていくらしい。しかして、「き一ちゃんの言いたいこと」とはナニ？それは私の目には明らかだし、洋子の目にも明らかだが、洋子と同じ目線でき一ちゃんや三日月園のことを観察していたのが、若い職員のさとくん（磯村勇斗）だったらしい。しかして、彼は一体どんな男・・・？

### ■□さとくん（磯村勇斗）×陽子（二階堂ふみ）の表と裏は■□

本作の大量殺人事件の犯人となる、さとくん役を演じるのは、若手イケメン俳優の磯村勇斗。本作前半に見るさとくんは、一見真面目に働く好青年に見える。絵が大好きだという彼は、収容者たちの“お楽しみ”として“紙芝居”を提供していたが、その出来はそれなりのものだ。もっとも、美大を目指し画家を目指したヒトラーが、美大受験に失敗した後、突如“化け物”に変身したことを考えれば、今、三日月園で重度障害者を相手にする、紙芝居の絵を描くしか能のない（？）さとくんも、いざれヒトラーと同じような化け物に・・・？それはともかく、本作では、ストーリー展開の中に見え隠れするさとくんの人格の表と裏をしつかり読み解きたい。

他方、有名作家である洋子が同僚として入所してきたことを喜んだのは、同じ作家志望の女性、坪内陽子（二階堂ふみ）。彼女は一方では、洋子と同じように重度障害者施設における体験やそこから得た“何か”を小説で表現したいと願っていたが、同時に自分の才能の限界を感じていたから、彼女の感情は複雑だ。私の大好きな二階堂ふみが、そんな複雑なキャラの陽子役を、洋子の作品はホントの現実を描いていない、見て見ぬふりをしているだけだと、半分酔った勢いで酷評し絡んでいく演技等で見事に表現しているので、それに注目！本作では、さとくんの人格に見る表と裏が最大の注目点だが、同時に陽子のそれも相当なものなので、それもしっかりと確認したい。

## ■□き一ちゃんは“ひと”？それは無理！だから・・・■□■

「人間は考える葦である」。これは、17世紀にフランスが生んだ哲学者パスカルの名文句として誰でも知っているものだが、あなたはその後、18～19世紀にドイツで生まれた「ドイツ観念論」または「ドイツ理想主義」と呼ばれる“哲学”的ことを知ってる？私は高校時代にその存在を知り、大学に入った後は、ヘーゲルの弁証法とマルクスの唯物論を結合させた“弁証法的唯物論”を学習したが、それはひどく難解だった。このような哲学は世界を“変革”するためのものもあるが、その基本は「ひととは何か？」を考えるものだと私は考えている。しかし、それは難しいものだし、そもそも“ひと”を定義することにどこまで意味があるの？そんなことを考えながら、他方で私は、トルストイの『戦争と平和』を何度も読んだ後、オードリー・ヘップバーンがヘンリー・フォンダ、メル・フラーーと共に演じたハリウッド映画『戦争と平和』（56年）を観た後、ナポレオンを英雄と考え期待していたピエールが、モスクワが占領される中でなぜナポレオンを殺そうと決意したのかについて、深く考えさせられた。

しかし、本作後半からはき一ちゃんへの扱いや三日月園に対して、きっと洋子と同じ怒りの気持ちを抱いていたさとくんが、ヒトラーばりの“確信犯”として三日月園に収容されている重度障害者たちを「殺せる限り大量に殺すべきだ」との決断を下し、その準備万端を整え、それを実行していく姿が描かれるので、それに注目！さとくんはなぜ、そんな決断を下したの？それは、重度障害者として、窓もない部屋の中で、長年ベッドに寝かされただけの存在であるき一ちゃんは“ひと”と言えるの？と、何度も何度も考えた挙句、彼は“ひと”とは言えないとの結論を下したためだ。

私は、去る9月23日にキアヌ・リーブス主演のシリーズ最新作たる『ジョン・ウィック：コンセクエンス』（23年）（『シネマ53』55頁）を鑑賞したが、そこでは計算され尽くした主人公のガンフルを中心とするアクションが輝いていた。それに比べれば、さとくんが準備した鎌やナイフでき一ちゃんをはじめとする収容者を次々と殺害していくのは極めて容易だが、それでも、血しぶきを浴びながら次々と殺害行為を続けていくのは大変だ。さとくんは一体どんな心境で、それを実行したの？ちなみに、それを植松被告の言葉から推測するのはナンセンスで、それは、あくまで石井監督が脚本を書き、さとくんのアクション

をスクリーン上で演出した石井監督の本作を鑑賞する中で考えたい。

## ■口■心はありますか？それが分岐点！2人の大論争に注目！■口■

ドストエフスキイの『罪と罰』(66年)では、主人公のラスコーリニコフは、老婆から金を奪うことは許されるとの判断の下に老婆を殺害したが、そのことの当否は？若いとはいえ、三日月園での勤務の中でき一ちゃんの世話を含む、重度障害者の介護という仕事に従事する中でさとくんは、動けないことはもとより、口もきけず、人の言うことも理解できない、き一ちゃんのような重度障害者は“ひと”とは言えないと結論付けたらしい。そして、彼は“ひと”と言えるかどうかを判断するリトマス試験紙になるのは、「心はありますか？」との問いかけだと考えるようになったらしい。つまり、彼は「心はありますか？」との質問を理解し、「僕には心はあるよ」と答える重度障害者は“ひと”だから殺さないと決め、逆にその質問に対して回答がない重度障害者は殺してもよい（殺すべき）と決めたらしい。ロシアの青年、ラスコーリニコフの前記の思想については『罪と罰』の中で雄弁に語られているが、さとくんのそんな思想（？）については、本作ラストの約10分間にわたる「さとくん VS 洋子論争」の中でタップリ聞くことができるので、それに注目！ヒトラーの“優生思想”は彼がナチス・ドイツの権力を掌握した後、ユダヤ人への大虐殺として実現してしまったが、それに匹敵するような（？）、さとくんの「心はありますか？」との質問による“ひと”と物体（？）との分離論（思想）の当否は如何に？

ちなみに、さとくんの怒りを共有するのは洋子（のはず）だが、さとくんの行為を目撃するのは、もう1人の陽子になるので、それにも注目！なぜ、陽子がそんな立場になったのかも微妙なところだが、あれほど強く洋子の作品を貶していた陽子なら、これだけの体験をし、これだけの目撃をすれば、今後“良い小説”が書けるかも・・・？

他方、出生前検査の期限が迫っていた洋子は、さとくんによる凄惨な事件発生のニュースを聞いて、産むのか産まないのかについてどんな決断を？おっと、洋子がその決断をするについては、長い間、趣味の域を出なかった（？）昌平の仕事が、小さな賞とは言え、はじめてパリで受賞したとの報告を昌平から聞いた後だったから、きっと前向きのものに・・・？

逮捕されてしまったさとくんを除く、洋子と昌平、そして陽子の今後の方向性について本作は何も示さないが、本作の観客は私を含めてそれもしっかりと考えたい。

2023（令和5）年10月19日記